

## 第1学年研修

薄暗い空に青空がのぞいている。いつもより軽めの荷物を抱えた生徒がぞくぞくと菁我堂に吸い込まれていく。「おはよう」「うい～すっ」「おはよう」ちょっと眠そうで覇気のない声の中庭に響く。4月26日、修猷館高校の朝の風景であった。2年生と3年生は通常通りに朝補習を受けている。先輩に迷惑をかけないようにと昨日のHRで担任からしつこく言われている。「わかっているよ。何度もいわなくていいのに」とつぶやく生徒の声が聞こえてきそうだ。

8時40分。菁我堂に集合し各クラス2列に並び行儀よく座っているのは入学したての1年生である。背の高いユウカリの新緑が窓からのぞき、枝がゆさゆさとしなやかに揺れている。春の風は気まぐれだ。突然ぶお～っと吹いたかと思うと、芽生えたばかりの葉をなでるようにしなやかに揺さぶる。本来ならば久住高原での2泊3日の宿泊研修である。今年は、12日前に起こった熊本地震の影響で校内での研修へ慌ただしく変更になった。場所こそ違え、ともに過ごす時間が少なくなったとはいえ、中学生から高校生へと意識を変換する大事な行事である。今日から3日間の1年生の研修の幕開けである。

菁我堂では緊張感にあふれた顔、眠そうな顔、あたりを伺っている顔、友達との目配せをし笑っている440の顔が前を向き座っている。右正面には、進行役の生徒がマイクを持ち立っている。進行役の一声で、会場はすっと静かになっていく。館長先生の挨拶から始まる。館長先生の話は、入学式に最初に接して以来、年度初めの行事で何度も聞いてきた。しかし、それは、講堂のステージと3階席というちょっと離れた場所からである。高いステージがあるわけでもないこの菁我堂で、マイクなしでも十分に聞こえそうな場所で、1年生にだけ向けた話を聞くのは初めてだろう。いつもより親しみのある館長先生の声が柔らかく生徒の耳に届いていく。

「学年主任講話。梶先生お願いします。」研修の最初の講話である。梶先生の口からは、今回の研修が変更されたことや、今九州で起こっていること等を通じ、新入生が修猷館高校1年生へと成長してほしいという期待が語られる。

続いて、高橋利夫先生から研修の趣旨説明が具体的に語られた。コンテンツとは、プロセスとは、協働とは、関係性とは何か。なんとなく分かっているような気がしているけど人には説明できない理解の程度であった生徒の頭を、明確にしていく。きっとこれらの言葉や考え方は、この学年が学んでいく3年間の共通言語に違いない。研修初日のこの時間で、今回の研修が、卒業を見据えた、いや卒業後の生き方を見据えたものであることが示されたのである。15歳は15歳なりの脳細胞でこれから理解していくはずである。

館長先生、梶先生、高橋先生のお話を聞きながら聞いている私服姿の3人が椅子に座っている。さっき、高橋先生から紹介があった卒業生である。九州大学2年生綾部君、熊本大学1年生の中村さんと小川さん。私服のためか、大学生になっているためか、とても大人びて落ち着いて見える。大人になれば5歳の差は大きくないが、成長期の5歳は大きい。総合的な学習の時間SureYouCan講座「語る①」の語り手は、高校を卒業したからこそ語れる高校生活、人生の夢、現在学んでいることと高校時代に学んだことのつながり等について三者三様に語った。5～6歳年上の先輩は、年齢よりも遙か上に見え、もしかしたら毎日会っている先生達よりも偉大に、素敵に、きらきらと、1年生には映ったのではないだろうか。口をぽかんと開けて聞く生徒、身を乗り出して聞く生徒、何かを忘れないようにとペンを走らせる生徒・・・

確かにこの瞬間は、中学生までは遠い夢物語であった「大学生」が、一步近づいてきた瞬間であった。さすがに菁我堂での体育座りの姿勢はくたびれる。そう思った頃に、次のプログラムである。研修の場所は教室だ。菁我堂から躍り出た生徒達は、一気にそれぞれの教室へ向かう。滞っていた血液を全身にぐいと押し出すように生徒達は教室への階段を駆け上がっていく。

教室での研修2は、総合的な学習の時間 SureYouCan 講座「まとまる」である。これは本校恒例のプログラムであり、緊張の塊である1年生を少しでもそこから解き放とうという意図も見え隠れする。クラスで、1班4～6名のグループで行うゲームで、メンバー同士のピース交換によりメンバー全員が同一の図形をつくるのである。これには厄介なルールがある。声やジェスチャーは禁止、自分からピースを要求できない、手元に1枚は残しておかなくてはならない等、やっかいである。クラスメートとはいえ、入学してまだ3週間、ほとんどしゃべったことのない者同士でできたグループもあるのだ。かすかな緊張が生徒の間に漂う。ゲーム開始の合図はクラスによって違う。さりげなく「はじめ」という担任、幼稚園のかけっこを思い出させるような「3・2・1・ドン」という担任、「いいか～」と担任が言ったときには既にゲームを始めている生徒に苦笑いする担任、「黙祷」としばらく心を静めさせる担任、特に合図もしない担任。とにかく、440名、11クラス、約90グループはパズルを手にして奮闘開始である。しゃべらないというルールは往々にして忘れ去られている。「ぎゃお」「やばい」「え～」「何で」「うそ～」「あっ」「な～ん」「すごっ」と漏れ出る言葉は、高校生へと成長する過程の喃語とも言えよう。生徒はパズルを完成させることで、「言語を使用しないで深まるコミュニケーション」を実感し、グループ行動では自然発生的に生じる役割があることを再体験するのである。もちろん、中学時代にも物事を進めるには役割があることを体験している。その役割を生徒自身身が負ったり、友達が負ったりしてきた。役割を果たそうと悩み苦しんだことのある生徒も少なくない。その背景には、友人や先生達から任せられてきた経験があげられよう。でも高校生になった今、生徒は誰かの恣意的な作為によらず、生徒同士で起こる自然発生的な役割があることを体験することになる。それは自分も知らない新たな自己を発見する機会でもあり、友達を認める機会でもある。まさに、自分の限界を知り「私はいったい何者か」という思春期の課題への突入である。



続いて行われた研修3もクラス別研修である。総合的な学習 SureYouCan 講座「協働する」である。さっきの研修とは違ったメンバーでの研修である。せっかく話ができるようにになったグループを解体させるなんて、さっきと同じだともっとスムーズにいくのになあとの生徒の思いは知ったことではない。先生達はずっと先を見据えて意図的・計画的に研修を仕組んでいるのである。新たなグループに今度は茶色い封筒が1通づつ渡された。その中には、A4サイズの紙が20枚入っている。この用紙でどれだけ高いタワーを作るかを競う単純なゲームである。しかし、使ってよいのはハサミとカッターナイフのみ。つまり、切るのはいいけど、のりなどでくっつけてはだめよというゲームなのだ。作戦タイムは15分。試作用に渡された2枚の紙を使って考える、考える、考える。そして20分間でタワーを建設しその高さ



を競うのである。作戦タイムでは、試作用の紙に図面を書く生徒、とりあえず切る生徒、そんな生徒を横目で眺めている生徒、隣のグループを偵察する生徒、いろいろである。作戦タイムが終了し、いよいよタワー建設である。床から建設を始めるグループ、机の上で始めるグループ。紙を丸め、切り込みを入れ、紙と紙をはさんだり、重ねたり、乗せたりと、どのクラスも様々なタワーがつくられていく。友達の手元をじっと見つめる、友達と一緒にそっと紙を重ねる、友達がうまく作業ができるように紙をしっかり固定する、一人でもくもくと紙に細工を施す、そんなクラスメートをじっと見つめる生徒。そんな生徒の姿は、担任にとって新たな発見の場である。どんな行動もどんな会話もその一つ一つが、隣のクラスの生徒よりも素敵に見えるのは担任のひいき目であろうか。いやいや、ありの儘の生徒の姿に触れるのはまさに担任冥利に尽きるのである。タワー建設はグループを変えて2回行い、個人記録を計算し、成績を競った。クラスメートと協働した結果が、自分の成績となるのである。個人と個人の関係性、人との協働を生徒はゲームを通して体験していくのである。

本日最後の研修は、今日のクラス別研修の振りかえりである。「振り返りシート」に何かを書くのだ。書くべき何かは、すでにシートに書いてある。「どのように感じたか。」「どのように変わったか」「何を考えたか。」等、てんこ盛りだ。さっきまでの喧噪は嘘のように、教室は静かな時間となる。生徒は時々空を見つめ、ペンを動かす。指先でペンをクルクルと回し、消しゴムでゴシゴシと文字を消し、机をコツコツと叩く。館長先生の挨拶に始まった今日を、目に焼き付いたシーンを頭に呼び起こす。今日の一日は、どんな一日だったのだろうか。生徒は大きな文字、小さな文字でシートに綴っていく。綴って初めて気づく自分の気持ちがある。自然と頭に浮かぶ光景があり、わき出てくる感情がある。生徒はそこで書くべき何かを実感していく。ただし、それはこれからの日々の生活で意識の奥底に沈んでいくことも多い何かである。しかし、一度生まれた何かは決して消えることなく彼らの中にあり続ける。それを何かと敢えて言うならば、成長の糧とでも呼ぼうか。「みんな、書きましたか？」と呼びかける担任の涼しげな声で、振り返りシートは回収され、研修一日目は終了した。

4月27日水曜日。研修2日目である。最近の天気予報は確かに精度があがっている。予報通りに朝からしょぼしょぼと雨が降っている。今日の研修は遠足。誰がなんと言おうと遠足なのだ。天気予報を信頼した先生達は雨天時プログラムを準備していた。11台のバスが決して広くない学校の駐車場に整然と並び始めた。貸切バスで九州国立博物館と太宰府天満宮へ行くのだ。8時30分、講堂での出席点呼である。クラス委員が出席点呼を済ませ藤原先生に報告に行く。私服姿の生徒は、いつもと違ってみえる。ジーパンにTシャツ、スカートにブラウス、大人っぽかったり、子どもっぽかったり、活動的であったり、おしゃれさんであったりと、15の春は満開である。

整列後、益森先生からまずレクチャーを受ける。「九州国立博物館に行ったことがある人は手を挙げて」という声に多くの生徒が挙手をした。「日本で国立博物館は4箇所あるが、どこにあるか言えるか？」という問いかけに数名の生徒が答える。「そうだ。東京、京都、奈良だ。この3箇所に共通点はわかるね？」益森先生は、生徒一人1人の反応を見つめるように右から左へと会場を見渡した。生徒は自分の持っている知識と照らし合わせるように頷いたりメモしたりしている。適度に生徒の興味を引き起こしたレクチャーが終わると、生徒代表が挨拶する。しかし、きちんと整列した生徒の反応はちょっと堅い。思い切り楽しんでいいのかどうか、どんな態度で臨むべきか迷いがあるのだろう。ここで藤原先生が笑いながらマイクをとる。「いいか。楽しむ時は思いっきり楽しんでいいんだぞ。元気出せ。」ともう一度生徒代表に、かけ声を出そうと声をかける。それに応えた生徒代表の「楽しむぞ～」という声は、朝の講堂



にしっかりと響き渡る。さあ、出発だ。クラス毎にバスに乗り、バスは一路目的地九州国立博物館に向かう。雨は大降りになったかと思うと小降りになり、一行の遠足への期待は膨らんだり縮んだりしながら到着した。ここからは、学年全員が集合することはない。ここは一般観覧者も多い場所である。人でごったがえす博物館入り口には畷末先生が控えて生徒を誘導する。生徒は長いエスカレーターに順々に乗って常設展会場へ移動した。そんな生徒の姿を捉えようと、写真館の原さんが博物館の中を行ったり来たりしてシャッターを切る。卒業生でもある原さんは入学から卒業までの姿を追っかけるのである。最近の子どもは被写体慣れしてる。どの生徒も向けられたカメラに臆することなくピースサインでにっこりと応じる。まず常設展会場を11時まで堪能することが今日の約束である。薄暗いが、所々にスポットライトが当たる会場は展示内容ごとにブースが仕切られている。教科書でみたことのある展示物もあれば、現代芸術としても通用するようなオブジェのような物もある。それらを自分ペースで回遊するように生徒は歴史の中で時を過ごす。常設展を堪能した生徒達は次の場所へと向う。太宰府天満宮に参拝する生徒、参道を散策する生徒、竈門神社を目指す生徒、それぞれの時間を過ごすのである。



バスへの集合時間が近づくと参道先の駐車場に生徒は傘を差し集まって来た。早めに到着した生徒は駐車場近くの売店で、ソフトクリームやジュースを美味しくそうに頬張る。帰り支度の頃になって雨模様だった空には青空が見え始めている。生徒が揃うとバスは学校へと向かった。3時間程度の太宰府の旅、果たして何人の生徒が境内にたくさんいる御神牛に気づいたろうか。学校到着後、クラスごとに解散である。研修2日目。生徒はケガをすることもなく無事遠足を終了した。



4月28日木曜日、研修3日目。最終日である。今日も雨である。1年生は学校での研修であるが、2・3年生は今日が遠足。行き先は海の中道海浜公園と能古の島。時折強く降る雨を見ながら、憧れの先輩のことが気になる生徒もいる。教室での点呼後、生徒は体操服に着替え体育館に集合した。今日も、代表の生徒が指揮をとっている。体育館に集合すると、まず先生による講話である。テーマは「私にできる危機管理」。熊本地震をきっかけに、日常から各自ができることを考えようという提案であった。ある日突然、防ぐことも予知することもできない大きな力で日常の連続性が絶たれ非日常となること、非日常に対応するには日常が大事であるという話であった。みんなで床に手を当て、この地面が熊本につながっているという事実を思い起こすという場面もあった。

講話のあとはラジオ体操で身体をほぐし、いよいよドッジボール大会である。ただの大会ではない。クラス対抗なのである。今のクラスが成立して約20日。偶然集まった生徒、偶然担当した担任。偶然の連続は、必然を感じさせる。このクラスで戦うぞ、隣のクラスには負けないぞという気持ちがふつふつとわいてくる



のである。それが人間に備わる闘争本能であれば、そこに距離を置き冷静に見つめる人間が存在するのも集団に備わる自然の理である。ピーっ。闘いの幕は切って落とされた。4面のコートで試合開始のホイッスルが鳴る。ボールを投げる、受ける。ボールがボンと弾み手から離れる、白線を越えて床を転がっていく。思わずボールに駆け寄り、バシッと飛んでくるボールから逃げる。キュッ、キュッと床が鳴る。「こっち、こっち」「やった～」「わ～」。コートの内外でかけあう声、ギャラリーからの声援、限られた空間で生徒のエネルギーが目一杯はじける。体育館の片隅では、その眩しいほどのエネルギーを浴びつつ担任と副担任が我がクラスを応援している。拍手をしたり足踏みをしたり、何と言っても我がクラスが一番なのである。あっという間に試合は終わった。優勝は3組である。決勝戦の戦いぶりはもちろん、どのチームも初戦から一戦一戦円陣になり、声を掛け合い、作戦をたて、互いにかけてより精一杯闘った。閉会式では、生徒代表が仲間の姿を講評した。成績発表では梶先生から表彰状が手渡された。壁際で思わず洩れる笑顔を隠そうとしないのは3組担任の藤先生であった。おめでとう。



12時30分。最後の研修である。場所は講堂。体操服から制服に着替え生徒はぞくぞくと集まってくる。総合的な学習の時間 SureYouCan 講座「語る②」。ここからは1年生だけの世界である。生徒は誰とどこに座っても良い。一人きりでも、2人組でも、それ以上の友達と一緒にでもいい。マイクの真ん前でも、みんなの後頭部が見える後ろでもどこでもいい。今までの自分、これからの自分について、「今」の自分が考える。そして、伝えたい者が自分の意志と言葉で伝えるのである。伝えるばかりではない。仲間の意見や意思を聴く時間と場所なのである。進行役が発言者はいないかと尋ねる。挙手した生徒を進行役が当て、発言するという流れである。時には質疑応答もある。いわゆる予餞会のミニバージョンである。この機会に発言したいと事前に考えてきた生徒も少なくない。しかし、最初はなかなか手が上がらない。互いの顔を見て、牽制したり、伺ったり、後押ししたりしている。最初の手が挙げると、それを皮切りに少しずつ手が挙がり始める。進行役から発言権を与えられた生徒は、半円陣形のように座っている440名の仲間の前に立つ。



15年間の人生を彼らは彼らなりに生きてきた。万能感に満ちている者もいれば、人には言えない悲しみや辛さを味わってきた者もいる。夢や希望でいっぱいのものであれば、前を向くことさえ躊躇っている者もいる。本校の文化である「語り」は、思春期の若者が、何かを表明し、何かを踏ん切りをつけ、何かと決別するための儀式ともなる。気軽にマイクを持ってはいるものの、第一声の前にちょっと肩をそらし息を吸う姿は、決して気軽さだけではないことを物語っている。そして、その思いを察し自分と重ね合わせる生徒もいることだろう。しかし、やはり現代っ子。テレビ番組を真似て笑いをとったり、やはり言葉で話したりする姿は、どこにでもいる普通の高校生なのだ。時間とともに、講堂全体が熱を帯びていく。



数人で固まっている生徒がいる一方、1人でこの時間を過ごしている生徒もいる。下を向いている者もいれば、友達と一緒に笑ったりつつき合ったりしている者もいる。熱気だけではない思春期の想いが講堂を包んでいる。110分間は、あっという間に過ぎていった。

研修は終わった。最後は、梶先生の講話で締めくくりである。研修全体から見える研修の成果と課題が丁寧に具体的に語られた。研修の様々な場面で見える行動には、成長が伺えるものもあれば大人から見ると看過できないものもあったことを、仲間の語りの後に大人の言葉で聴くのである。そういえば、研修中、先生達は様々な場面で生徒に声かけをしていた。下を向くことなく梶先生をじっと見つめ聞き入る生徒に「臆することなく個性を伸ばそう。」という想いが伝えられた。この3日間でみられた生徒の成長が、日常の姿となっていくことこそが修猷館高校の生徒としての一歩である。440名の一歩が「いま、ここから」始まるのだ。